



KAORURU

AOI

JIBAKU-SYSTEM 2009

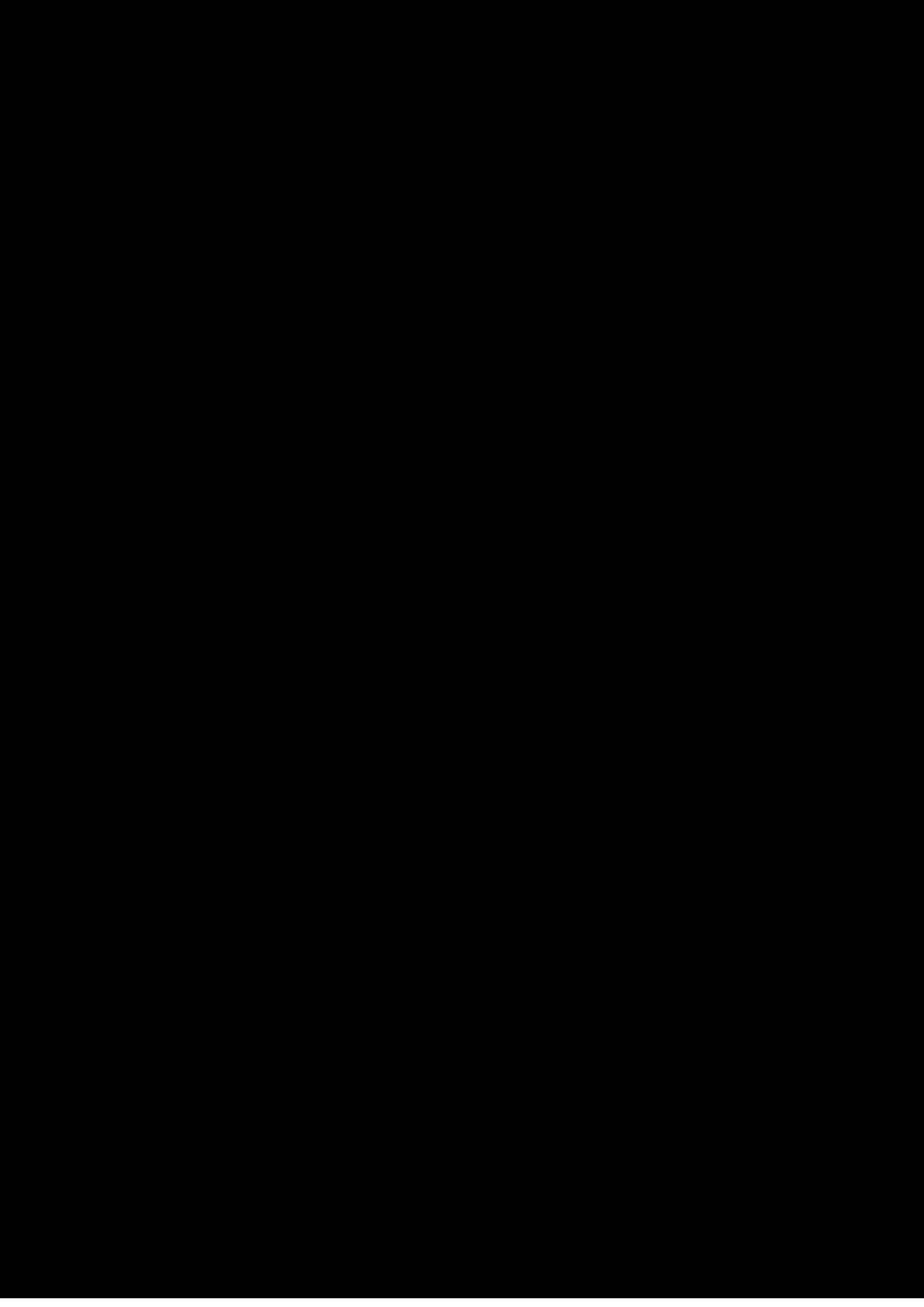
**B.A.B.E.L**

The strongest children in the world.

**M.I.N.A.M.O.T.O**

Though it gets him, they don't choose a means.

18禁  
WARNING OVER 18 AGE 成年



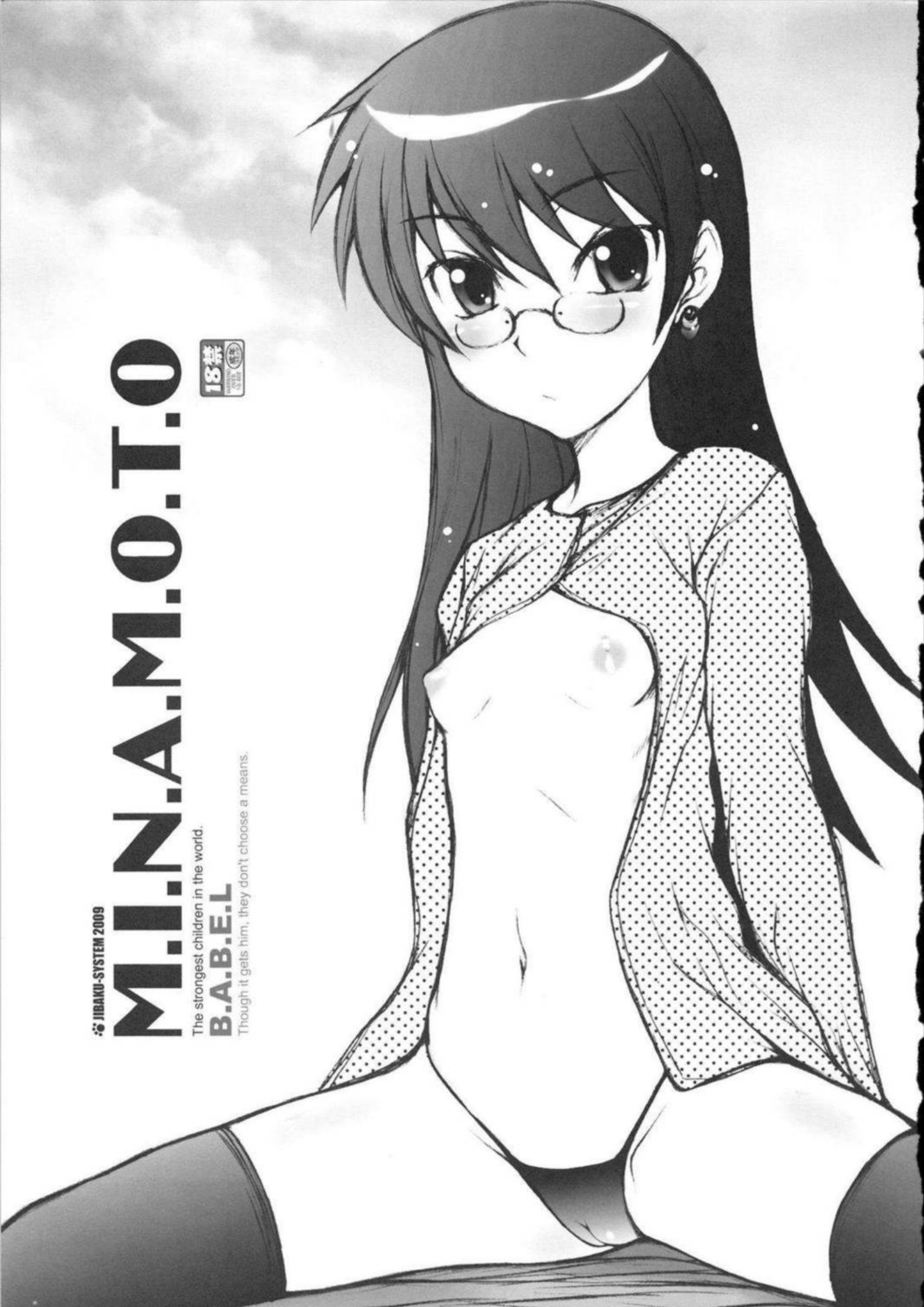
© JIBAKU-SYSTEM 2009

# M.I.N.A.M.O.T.O

The strongest children in the world.

## B.A.B.E.L

Though it gets him, they don't choose a means.



Copyright 2009 Jibaku System  
all rights reserved. no part of this book may be reproduced or transmitted  
in any form or by any means, electronic or mechanical, including  
photocopying or recording, without permission in writing from publisher.  
published and distributed by Jibaku System keeping group.

# CONTENTS

🐾 JIBAKU-SYSTEM 2009.08.16

## M.I.N.A.M.O.T.O

P05 「MINAMOTO」

作：涼樹天晴

P30 「MINAMOTO」

文：黒田百年

P04 目次

P36 あとがき

P37 未定予告

P38 おくづけ



まるがき

前面投影面積がドレットノート級の涼樹天晴（すずきあまはる）です。  
このシリーズ最後の本です。

「結」です。

漫画（エロシーン担当）＋小説（話進行担当）の構成となっております^^

CASE.01

野上 葵





光一はん…

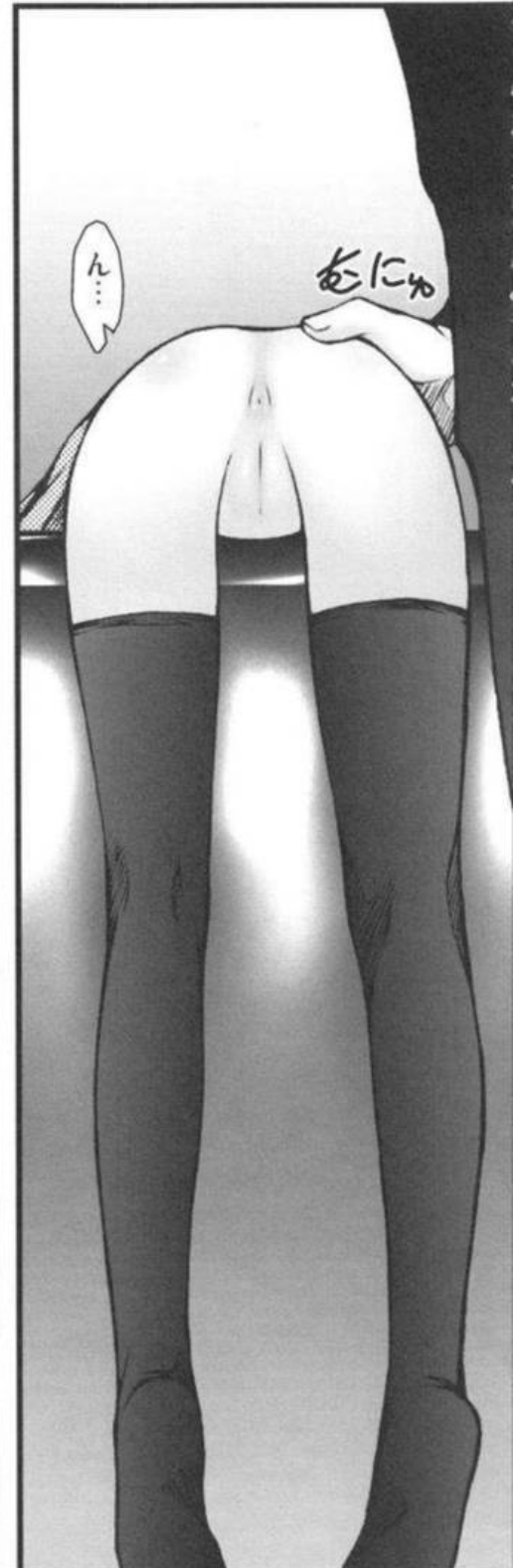
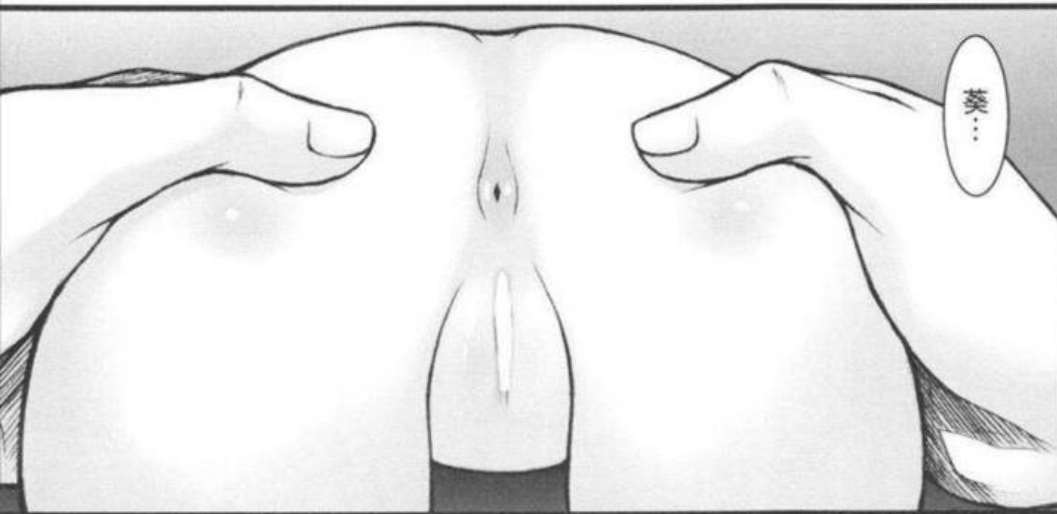
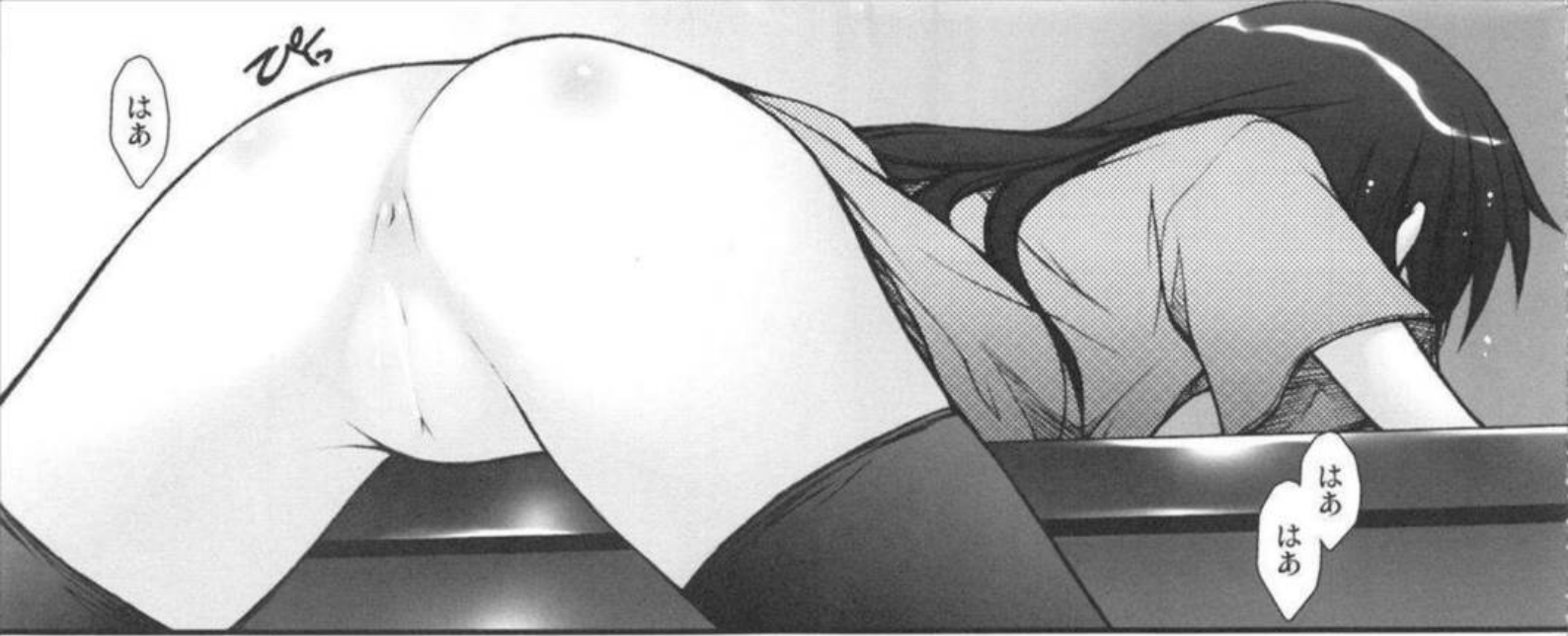
羨…

あ

む…

やん…  
そ…

…駄目









あ

ああ

ふあ...

そんな...急に...

奥まで...いれ...た...ら

ガッ

ガッガッ

ガッガッ

ガッガッ

ガッガッ

あん

ガッガッ





くう

びん

あつ

クワッ

クワッ

どくどく流れてきている

出てる

うちの中に  
光一はんのが



はあ

はあ  
はあ

びびん  
びびん

光一はん…

葵…  
気持ちよかったよ

ひゃん



する!

次…お尻ですか?

うちの中一杯で  
はいりきらんわ…

それにしても  
光一はん…出しすぎ…

喜んでもろて嬉しいは…

びびん  
びびん

CASE.02

三宮紫穂



紫穂の胸が一番大きいな

学年でも割と大きいほうよ

ふん、

それじゃあ  
もっと大きくしようか

あん

ちゅう

ふん

ふん

ひゃん

ほん

ぼー

ん

光一さん  
ちゅうちゅう吸って  
赤ちゃんみたい

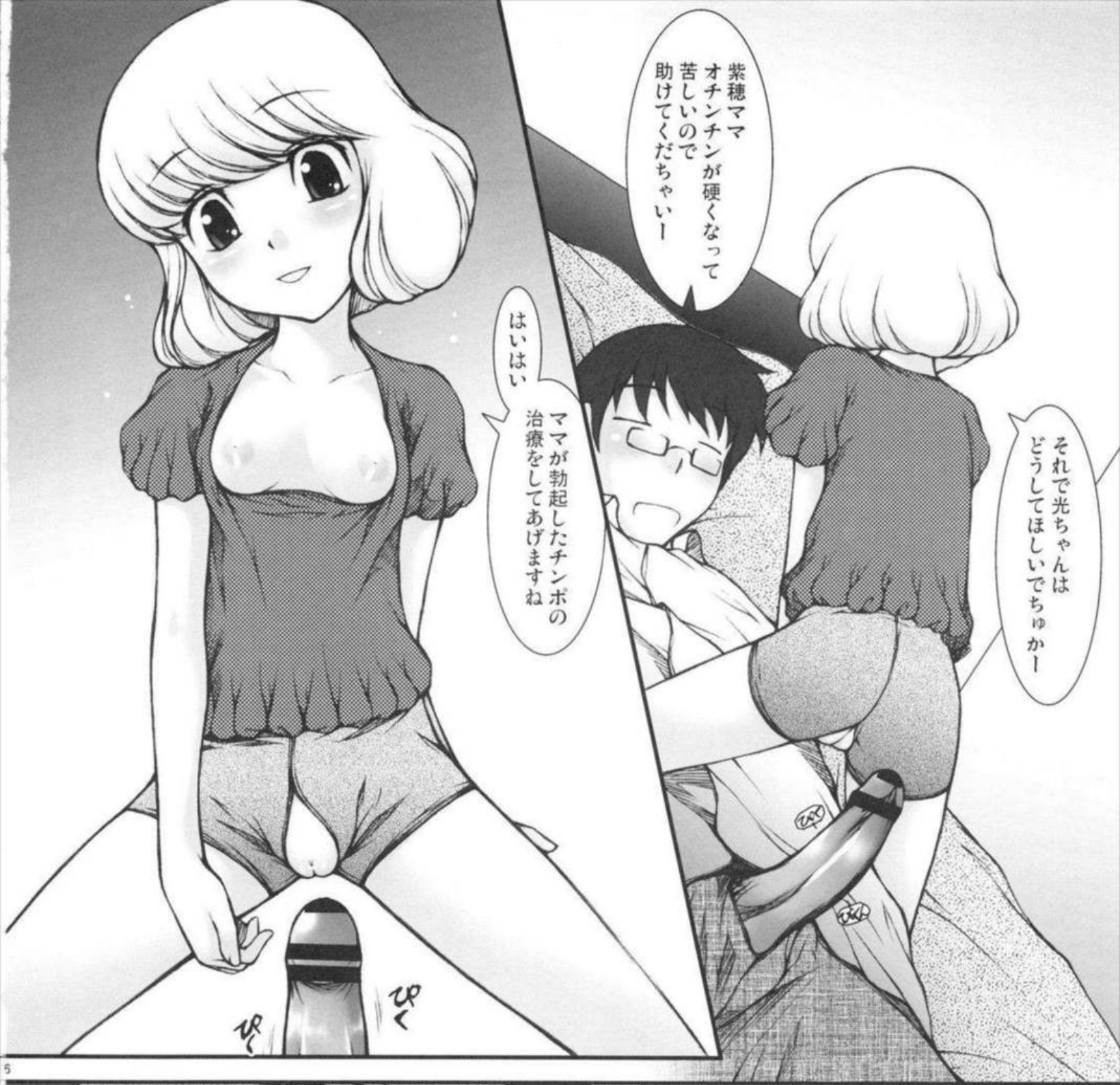
ちん

ぷりん

それでは  
紫穂ママが…

光一赤ちゃんのお世話をしないとね

それと赤ちゃんなので  
寝て下さい



紫穂ママ  
オチンチンが硬くなって  
苦しいので  
助けてくださーいー

はいはい  
ママが勃起したチンポの  
治療をしてあげますね

それで光ちゃんは  
どうしてほしいでちゅかー



それでは  
いきますよー

ん

にちゃう



あは

チンポが大きすぎて  
半分も入らないわ…

あはあは

あはあは  
あはあは  
あはあは

ところで光ちゃん  
小学生ママに上からされて  
どんな感じでちゅかー？

ああ…きつきつで  
気持ちよくて…  
すぐ直りそうだ…



光ちゃんは正直なので  
ご褒美に全部ママが  
治療してあげます





ああ

カッ

紫穂

紫穂…ママ…

ママ…

はあ

カッ



はあ

いい…奥に出てる…

チンポが…奥まで刺さって…  
ママの中に…

光ちゃんの精子が…  
ママの子宮の中に出てるの…

あ  
はあ

カッ



ああ

あ  
あ

はあ

カッ

カッ

カッ

カッ



CASE.03

明石 薰



んふー

んふー

ああ…薫が一番  
さわり心地がいいな

どう皆本？

ん…う

んふー  
んふー

んふー  
んふー

あん

あん

お尻も…な  
ピチピチしてて  
いいよ

さわさわ

んふー





皆本ー

もう私のこは準備オツケーだからズバットベニス挿れてみよー

ズバット？

男の度胸  
をぞ

そうズバット  
一気に遠慮なくね

一気に…

んあ



薰ー

ズ  
ッ

あ  
あ

んあ  
んあ

ひきい





はあ

はあ

おはよう

おはよう

み…  
皆本

あ  
ふあ

びり

ああ

薰！

薰

薰

ガクッ

あ

ガクッ

おはよう

おはよう

あ

ガクッ

ガクッ





かおるー

びく

あ

あ

あ  
あひい

びく

びく  
びく  
びく  
びく

びく

びく  
びく  
びく

びく  
びく  
びく



暴走...しすぎ...

み...皆本

はあ  
はあ

はるる

ちゃほん

ふあ  
はあ



それに...まだベニスがちがちじゃん

暴走した罰として皆本のスベルマが  
空になるまでして貰うからな！

中にいっぱい出して  
くれたのはいいけど...

まだ私は初心者なんだから  
もう少し手加減してくれないと...

はるる

はあ

帯見…管理官  
ここの映像は…

だってさー

皆本くんが固すぎるのがいけないのよ  
さっさとチルドレンと結ばれちゃえば  
世界も救われてハッピーになるってのに

ましてや小学生だから  
ちっとも手を出さないんだもん

あ、でも本当に興味、好感持って  
なかったらんにもないわよー  
そうゆう意味では同意だから和姦よね  
それに皆本君も正常な男子ってことねー

セックスって元々はコミュニケーションの一つでもあるから  
対戦ゲームやるくらい気持ちになるように

できる！  
大丈夫！！

ヒュプノスでー

洗脳しちゃった♥

それとー相手が小学生でも  
複数でも可能なように…

あんたって人はー！

あーもう  
うーさー！！

小学生だろーか  
4Pだろーか  
あんたなう

イキ

「あつ、あつ、あんたって人はー！」

桐壺のギャラクティカファントムが全力で炸裂した……。

「おふう……」

爆音と同時に宙に舞う。不二子は、広い部屋の中を自由自在に踊ると、どさりと音を立てて、身体は音もなく地面に叩きつけられる。

無駄に広いと思わせる部屋の中、マホガニー製の重厚で大きな机がでん！と置かれている。異様な程の存在感がそこにあった。そしてその机に負けないほどの大男がどっしりと拳を構えながら、突っ立っていた。触れれば斬れるのではと言うか、触れればボコられると言うような異様な空気がだ。

事実不二子をぼこった後だつたりする。

桐壺は、その体躯に似合った

自分の上司を遠慮無く、殴り飛ばしたまま、ワナワナと全身を振るわせている。

「いたたたたつ、桐壺くんも腕を上げたわね」

不二子は、顎に手をあてながら、ゆっくりと腰をおこす。それはひどく緩慢な動作だ。桐壺は、その様子を眺めながら、拳をハンカチで吹き直し、重々しく口を開いた。

「なんて非常識なことをしたんですか……全く」

「だってさーあの子達見てたら、いじましくて、ついついねえ」

桐壺は深く頭を抱える。事の次第を考えると、とんでもない事だ。

「そんな事であんたは……」

「そんな事って重要よ。ただねー。赤飯前だから大丈夫かと思つてたんだけどねえ」

不二子は、困ったように掌を再びひらひらとさせながら、桐壺をからかうように笑う。まるで悪びれていない。

「今更そんなこと抜かすか？」

桐壺は、再び腰を上げる。ガタリと椅子が大きな音を立てた。

そのまま一歩踏み出そうとするが、それを堪える。桐壺の顔に鬼相を浮かべている。

いつもの桐壺と違い、怒りが限界を超えているのだろう。

「やん、不二子こわああい」

「だから、そう言う態度を辞めろつて言つてるだろクソババア」

「誰が、クソババアだつて？」

不二子は、殺気を込めて睨み付けるも、桐壺はまるで動じなかった。いつもと違い食い下がるように声を荒げる。

「あんたね！ チルドレンは、国の宝なんですよ！ その宝をなにキズモノにしとるんですか！」

たしかにその通りだ。

「だから、報告してるでしようが……少し落ち着きなさいよ」

「全く……で、あんたどう落とし前つける気だ。というか、こういう事態は想定しなかったのですか？」

「まさか、こんなに上手く行くなんて不二子思つてなかつたんだもーん♪」

ちゃかすように、しなを作る不二子。

ことさら、ちゃかしているように見える。

（くっ……）桐壺は心の中で、拳を握りしめるとさらに心の中で続ける。

(こいつがエスパ―じゃなければ、今ここでぶち殺してやるのに……)

ワナワナと、肩を振るわせながら、桐壺は不二子を睨み付けている。

「なあによ。さらに怖い顔しちやってえ。良いじゃない？ 結果的に任務も人間関係もうまくいってるんだしい〜」

「なに、今更かわい子ぶってるんですか！ いい年こいて……」

ダン！ と大きな音が、不二子の方から力強く響く。

今度は、桐壺がびびって身を引いた。

「桐壺くん……」

「なっ、なんででしょうか……」

「不二子、年のこと言われるの大嫌いな、分る？」

「そっ、そんなこと言う権利が今のあんたにありますか？」

桐壺は、必死に踏みとどまりながらも、頭を抱える。

「いいのよ。多少、羽目はさすがに、ちよほど良いのよ」

「羽目はさすがに！」

思い切り机を叩きながら、怒りにまかせた声を上げた。

「はいはい、大丈夫だって、不二子。アフターケアは万全なんだから」

「大丈夫じゃないだろ……普見管理官」

「なに？」

「低年齢出産のギネス記録をご存知ですか？」

「え〜！ 不二子わかんない！」

「五歳だ！ 五歳！ 五歳七ヶ月二十一日だ！」

桐壺の言葉に、不二子はカラカラと大声を上げて笑って答えた。

「いやあくもう、参ったわねえ。そんな前例があるなんてねえ」

「笑ってごまかすな……」

桐壺は、深々と溜息をつき「頭が痛い」と臆面もなく頭を抱え込んだ。

「なんでもセックスで子宮を刺激し続けると生理がきてなくても排卵がはじまる場合があるんだって、だから安全日っていつでも中出しは危険だったのよねー」

「だから、なに解説してるんですか！」

「いやあくだってさあ、仲良く姉妹までは予測の範疇だったんだけど、みんな揃ってご懐妊だなんて、不二子困っちゃ〜う」

「なに、かわいらしく声を上げてるんですか！ 親御さんになんて言うつもりだったんです？」

「知らせるつもりはないわよ」さらりと告げる。

桐壺は、不二子の無責任な言葉に、拳に手を当てバキボキと音を鳴らしながら再び腰を上げた。

「だーかーら、そう殺気立たないでよ」

「なんで、私にまで黙ってたんですか……」

「知ったら、あんた反対したでしょうが」

桐壺の瞳が赤く光った。流星に、不二子も身の危険を感じて、ビビるように身を引く。

「当たり前でしょう！ 人として……」

しかし――

「人として……か」

不二子は、深くそう告げると、桐壺を無視して歩き出す。

思わず、桐壺はその肩を掴んで止めるかのように声をかけた。

「管理官？」

「ついてきなさい」

そう告げた不二子の言葉には、どこか決意が籠もっているような重みがそこにあった。桐壺は、とまどいながらその背中を見つめていた。

「どうしたの？ ついてきなさい。ヘリを待たせてあるわ」

「ヘリ？ 今日の午後のスケジュールは」

「柏木一尉に命じてすでに開けさせたわ」

「用意周到ですな。そのしわ寄せは私が負担するわけですか？ で、そこまでして——」

どこに行くと言うのだ？ 桐壺は、深い深い溜め息を一つついてから、諦めたかのように、不二子の後に従った。

\* \* \*

都内から離れた広大な敷地。樹海に囲まれたB・A・B・E・Lの研究施設までヘリだとそれほど時間はかからない。せいぜい小一時間と言ったところだろうか？ そこに向かう間、桐壺は終始無言だった。不二子も腕を組んだまま、無言で桐壺の正面に座ったままだ。

やがて、目的の実験棟の屋上に着陸すると、不二子は何も言わずに先に進んだ。慌てて後を追いかけると、その実験棟の頑丈な両閉じ型のシャッタの前に立った。桐壺は自分のIDカードをスロットに差し込んだがエラー。ドアは、彼を拒絶した。

「ああっ、ここはあなたのIDでも開かないわよ」と不二子は、自らのIDカードを差し込んだ。すると網膜認証のゴーグルが出てきた。それを慣れた手つきで、つけると承認を開始、そののちパスを音声認識で確認した上にようやくシャッターがスライドした。

「行きましようか？」

「……」再び促され桐壺は歩き出した。

どこか薄暗く人を拒絶するかのようなそんな薄ら寒さを感じさせる廊下だ。

先導するように不二子は先を行く。

無機質な壁、定距離で並ぶカメラ。あからさまに二人を捕えていた。

二人の影を照らすかのように照明の光が明滅した。カメラが意図的にフラッシュをたいたのであろう。厳重に管理され、その上、隔離された空間であることは桐壺にもよく分かった。

二人の足音は、壁にぶつかると跳ね返って戻ってくる。

「ここは一体？」

桐壺は、わずかに困惑しながら、問いかけた。

それもそうである。たしかにここは自分の勝手知ったるBABELの実験棟の中のはずなのに、まるで別の空間に改装されているのだ。

BABELの中にこのような施設があっただろうか？ 自分が知らない空間があること自体が気に入らなかった。ただ、自分の記憶に間違いがなければ、以前は医療施設の実験棟であったように思う。超能力を医療に活用するため、そしてそれをバックアップする機械を製作するための研究、実験施設だったはずだ。

「あら、桐壺くんには教えてなかったかしら？」

「今更白々しいですよ」

「そうね。そうかも知れないわ。でも、この施設自体は桐壺くんには秘密にはしてなかったわよ。報告書は、提出しているはずよ」



「記憶にありませんな」

「ピグマリオ計画……」と不二子は、呟いた。「あなたも知っているはずよ」

「ピグマリオ計画？ それは人工的に超能力者を生み出せるかどうかを実験する計画じゃ……倫理面で問題があるために中止になったはずでは？

それがどうしたんですか」

「ピグマリオ計画は、中止するのではなく、超能力を活用して妊婦の人命救助を行う計画にシフトしたわ。あなたも承認したでしょ」

「たしかに承認した覚えが……しかし」

「超能力を使ってより安全に母子の生命を救う……、それが今のピグマリオ計画の正体よ」と不二子。「子供の摘出に技術的な試行錯誤があったけどね。ついたわ……ここよ」

エレベーターをいくつかり継いでたどり着いた廊下の突き当たり。

さらに嚴重なドア。

不二子は、IDカードを差し込んだ後、パスコードを入力する。

ドアが開く。

強化ガラスで仕切られた空間は、無菌状態に維持されたクリーンルーム。

ム。

ここはその研究の様子を一望出来る部屋だった。

そこには羊水が収められた球体カプセルがいくつか並んでいる。

しかもそのいくつかは実験中なのか稼働していた。

部屋の中では、エンジニア達が働いている。

桐壺に背中を向けたまま、不二子は一部部屋の中にはいると、さらに

続けた。

「私はねあの予知を少しでも変更できる可能性があるなら、どんなこと

だって実行するわよ。それで未来が変えられるのなら、ね」

2

「そうね……私もそう思うわ……」

不二子の言葉に答えるように一人の少女の声が聞こえてきた。聞き慣れた声。

「……君は？」

桐壺は、驚いたように声の主に視線を合わせた。

少女だ。しかしその少女は背を向けたまま、桐壺には視線を合わせていない。

「紫穂君……」

部屋の中には、穏やかな顔をした一人の少女が、待っていた。穏やかな表情を浮かべ、ガラスに手を当てながら部屋の中を眺めていた。

少女の三宮紫穂、サイコメトラーであり、日本で三人しかいないレベル7の超能力者の一人だ。

「なぜ、ここに……」

「ピグマリオ計画の被験者で、協力者の一人だからに決まってるでしょうが」と不二子。

「なっ！」桐壺は、雷に打たれたかのように硬直していた。

「しっ、紫穂くん！」

「だいたい、協力者がいなきゃ、こんな危険なことやれるわけがなかったでしょ」

不二子はシレットと、告げる。

「皆本君は……みんなが妊娠したことは……」

「知らせてないわ。私からお願ひしたの。皆本さんには被害が及ばないすること、安全性が確認されたら、わたしを一番の被験者にするって言う条件で協力したの……」

「管理官！」

「局長、怒らないで。それが今回、私の出した条件だった。あのままだと間違いなく、万が一の問題が起きるのは間違いなし。自分たちの能力とBABELの技術を信じるわ。流石に、私達も性行為の危険性は理解してるつもりよ。低年齢出産がどれだけ母子に危険かも……」と紫穂は桐壺に表情を見せることなく、だが、明らかに聞かせるように咳く。

「それでも……わたしは、皆本さんと結ばれたかった」

「それだけ、覚悟を決めてるってことよ。この子達は、それだけ皆本くんのことを思ってるってことね」

紫穂は、ガラスの向こうにあるカプセルに熱い眼差しを送る。

「こっ、これからどうするんです？」

「だから、それを説明するために、あなたをここに連れてきたんでしょが……」

桐壺は黙り込んだ。それからガラスに手を当てたまま動かない少女の背中に視線を移す。

「あの中には、皆本ちゃんと紫穂ちゃんの子供が文字通り眠ってるの」

「眠らせてる？」

「そう、カプセルの中の胎児の時間を限りなく停止状態にして凍結させているわ」

桐壺は息を呑んだ。

紫穂は、視線の先にあるカプセルを愛おしげに眺めていた。

その中で、子供が健やかに生まれ眠っている。どのような形でも命を守ることを優先したわけだ。

「子供は……」

「今も眠り続けてるわ。カプセルの中は十年が一日程度の時間になるのよ。一見成長してないように見えてるけど」

「ちゃんと成長するんでしょうね。責任は——」と桐壺。

「私が、最後まで責任持つに決まってるでしょう」

「しかし……」と桐壺は紫穂に視線を送ると、それから研究施設の方を眺めやった。

ゆっくりとその紫穂の背中に近づくと不二子。

紫穂は決して振り返らない。

柔らかい仕草で腕をまわし、その背中から抱きしめる。

「十年なんてすぐよ……」

そのまま腕に力を込める。

「私達にとっては人生の二倍よ……長いわ……」

「そうだったわね……。ええ……約束の時まで私がちゃんと見てるわ……」

「そのときが来たら、産んであげるから……」

紫穂は、緩慢な動作で小さな掌を握りしめと、俯いた。

「桐壺くん、あなたもこの施設のことを知っちゃった以上逃げられないわよ」

その言葉に、改めて桐壺は、はっとする。秘密を共有させることで、責任を押しつける気だ。だから完全に極秘にせずに、書類を自分にまで回してきた——

桐壺はおずおずと振り返る。二人の視線が重なった瞬間、不二子はニッ

コリと笑った。

(はっ、ハメヤがったなこのババアあああ！)

「良かったわね。紫穂ちゃん、この施設は、しっかり保障されたも同然だわ」

3

そして時間は穏やかに流れる。

うらかな春の日差しが、青年と少女達を優しく包み込む。

蕾だった花は、今ゆっくりとその綺麗な花を咲かせようとしていた。少女だった身体も徐々に女へと移ろい変わってゆく。短かった髪は徐々に伸び、小さかった果実は、はつきりと熟れはじめている。大人への階段を明確に登っているのは明らかだった。

青年を取り囲むようにして、さざめきあう声。幸せそうな春の光にそこだけ包み込まれている。

そんなとき、ふと、一人の少女が、なにかを見つけて足を止めた。

「紫穂じゃないしたん？」

ロングヘアーに眼鏡をかけた少女が、声をかける。

「えっ？」

「あの親子を見ていたの……」

紫穂は、穏やかな笑みを口元に浮かべていた。

「赤ちゃん？」とボーイッシュな赤毛の少女、薫。

紫穂は、薫の言葉に軽くうなずいてから目の前の青年の右腕を取った。

「ねえ、皆本さん、子供は何人ほしい？」

「うちは一姫二太郎で二人やな」と、葵は左腕に抱きついた。

「私は三人かな」と薫が皆本の首元に背後から抱きしめる。

「おいおい！ お前達！」

「わたしは何人でもいいよ」と紫穂が腕に力を込めさらに身体を密着させる。

全員の身体が思い切り皆本に密着する。

「え、なっ！ そーゆー話はまだはやい！」

皆本は頬を赤く染めながら叫ぶが、無理に三人をふりほどこうとはしない。その様子を見て――

「へえ？」

「そうなん？」

「はやいだけなんだ」

薫、葵、紫穂の三人は、どこか妖艶に微笑んだ。

「だから、大人をからかうなって！」

「はいはい！ はやく産んであげるから、頑張りましょうね、パパ」

「誰がパパだ！」

皆本の絶叫が風に舞い、春空になびいて飛んだ。

終わり



MINA.MO.TO

## ■あどがき■

JIBAKU-SYSTEM  
2009.08.16-08.30

<http://hwbb.gyao.ne.jp/kimidori-pb/>  
[kimidori@pb.highway.ne.jp](mailto:kimidori@pb.highway.ne.jp)

DAY LIGHT STAFF

## ■涼樹天晴■

4号突撃砲をこよなく愛する涼樹天晴です。  
とゆーわけでこのシリーズ4冊をもって終了となりました(=ω=)  
4年間とゆー短くない時間、おつきあいくださりありがとうございました。  
もともと葵本一冊で終わるはずが4冊にもなるとは…だらだらとよく続いたものです(=ω=)!

えーとようするにこのお話の最後は「よはなべて事もなし」です。

…文は特に苦手な…書く事が思いつかない…

なんで結末が小説形式になったかとゆーと  
顛末ページを漫画にしたら構成の時点で12ページ以上になってしまい  
エロ本という形においてどーかと思ひ小説という形でまとめさせて貰いました。

今回、プロットもどきを黒田さんに渡して文章にして貰ったわけですが  
その黒田さんは小説家としてデビューですよ(´▽`)

出版社名「jive」

タイトル『あまうさ』

とゆー本がでます。

とゆーわけで見かけたらよろですよ。

## ■黒田百年さん■

[sidarezakura@hotmail.com](mailto:sidarezakura@hotmail.com)

<http://kurodahyakunen.blog42.fc2.com/>

涼樹氏の原案という形で小説を書いてみました。  
なかなかチャレンジのしがいのあるシナリオでした。  
楽しんでもらえたのなら幸いです。

8/31にjiveから『あまうさ』と言うタイトルのラノベが発売します。  
一般販売は8/31ですが、このコミケのjiveの企業ブースで特典付きで  
先行販売しております。  
興味がありましたら是非、どうぞ。

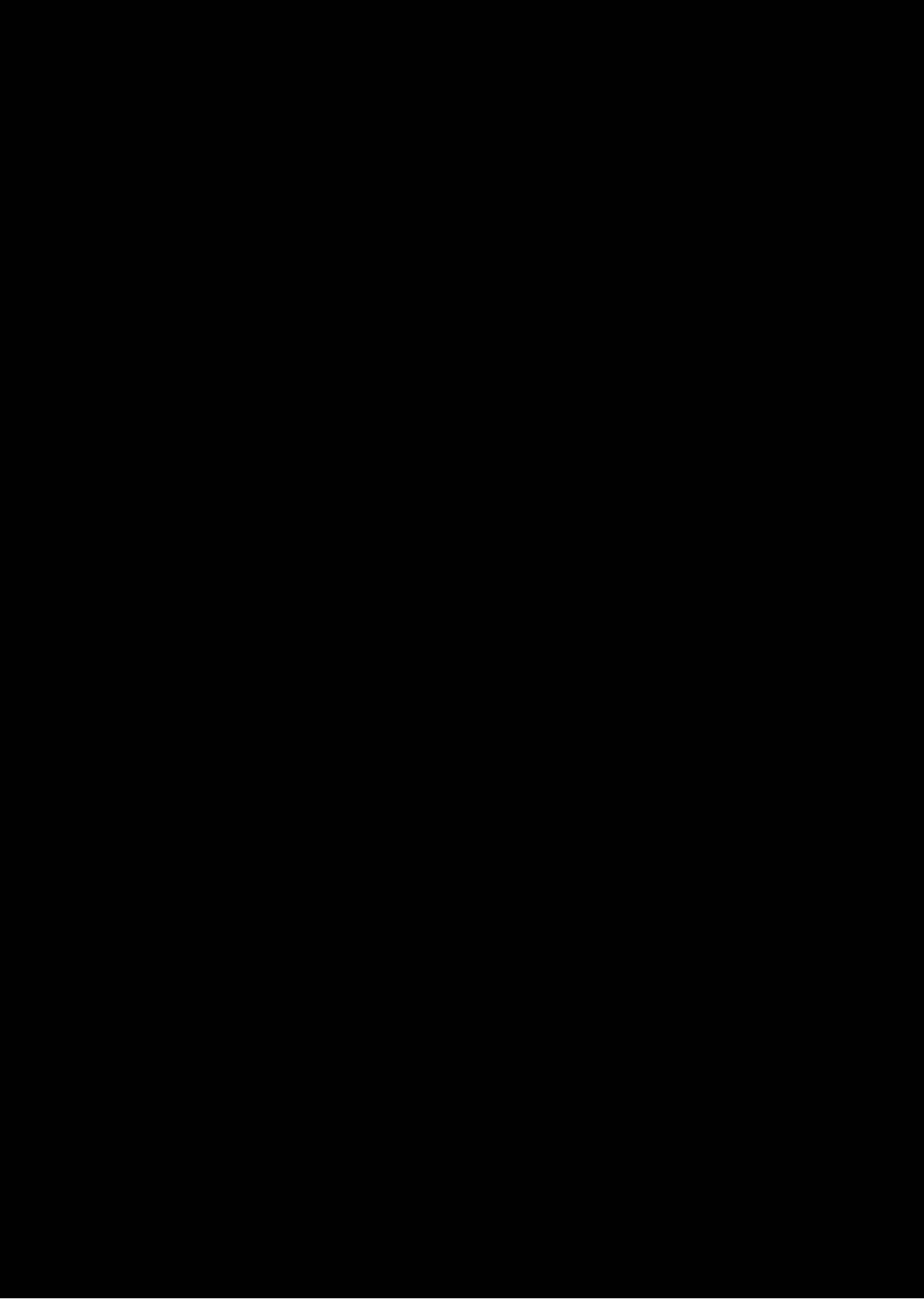
このラノベは「日本神話でSFを」と言うコンセプトで描いてます。  
今時珍しいコッテコテのスペオペです。売上げ次第では続刊しますので、  
良ければ応援してやってください。  
良ければごらんになってください。

## 予告ただし未定 (=°ω°=)

次回本の候補は葵本かアスカ本。  
前に作ったコピー本とか突発本がベース。  
でもここにきて真希波本も作りたいかも…  
だって名前がイラストリアスですよ  
鉄壁空母ですよ (≥。≤) (≥▽≤)!



ただその前に…コピー本とか  
ゲスト原稿とか突発本とか  
そろそろ整理しないと一  
管理できなくなってるし…  
まとめて本にしたいと思います (=°ω°)!





OFFICIAL

©JIBAKU-SYSTEM/2009

# MILK-A-M-O-TTO

The strongest children in the world.

**B.A.B.E.L**

Though it gets him, they don't choose a means.

18禁  
18歳以上  
利用可能